



【街のトピックス】 下関にゆかりの松本清張

長編推理小説「点と線」「ゼロの焦点」など多くの作品を残した作家・松本清張(以下「清張」と表示)が下関と縁があったと言うことは案外知られていません。北浦街道のまち興し事業で、平成30年の安富静夫氏(本町在住)の「北浦街道のあれこれ」の講演で触れられたことを思い出し、北浦街道の一つの隠れたお宝として今回取り上げてみました。幼年期の頃のことが自叙伝とも言える「半生の記」で触れています。読んで見ると、旧壇之浦町(今のみもすそ川公園辺り)、本町、上田中町、貴船町他と関わりを持っていたと思われます。最初は、1910(明治43)年頃旧壇之浦町海岸近くに両親と共に住み始め、1913(大正2)年清張4歳時、電車の線路敷設のためダイナマイトで山を崩している際に地滑りが発生、住まいが壊れたため上田中町(新町4丁目バス停近く)に引っ越し、1917(大正7)年に小倉へ戻るまで7年間下関で生活をしていました。清張が脚を運んだであろうという所の一部を別表の地図に表してみましたのでご覧いただければと思います。ちょっと脇道にそれますが、当時6歳年上の林芙美子が1911(明治44)年に鹿児島から名池尋常小学校に転入しています。生活した時期が重なっており清張と芙美子は田中町で同じ地域の風を感じていたかも知れません。下関にゆかりのある作家として興味深い一コマです。清張の経歴は別表を参照ください。

【半生の記からの紹介】

★小倉から転居してきたのは、清張1歳の時。現在のみもすそ川公園辺りの海辺(写真①)の一群の家6~7軒の1軒の2階で、家の裏の半分は石垣からはみ出し、海に打った杭の上に載っていたと半生の記に書かれています。



【松本清張の経歴】

- 1909(明治42)年 北九州小倉生まれ
- 1910(明治43)年 下関旧壇之浦に転居
- 1913(大正2)年 上田中に転居
- 1916(大正5)年 菁莪小学校に入学
- 1917(大正6)年 北九州小倉に転居
- 以降、小倉での生活が始まり、小倉の尋常高等小学校卒業後は川北電気を経て新聞社に勤めています。この頃から文学に目覚め、作家としての才能を発揮し、多くの作品を世に発表、数々の受賞、要職を担い20世紀を代表する作家として活躍されました。
- 1961(昭和36)年 東京に新築し移住
- 1992(平成4)年 逝去、享年84歳

みもすそ川公園にある一風変わったオブジェ(写真②)があります。彫刻シンポジウム実行委員会が1996(平成8)年作製された彫刻です。第2回下関市景観賞を受賞しています。清張が最初に住み始めた記念としてこの場所に文学碑として設置されたものと考えます。彫刻には、半生の記に記述されている文章の一部が刻まれています。一度訪ねて見られては如何でしょうか。

【御断り】

安富静夫氏がまとめられた資料を参考にしこの記事を編集しております。





★①上田中町の大師堂は、清張が眼を患い、母親が清張を連れてこの大師堂に祈願に出かけていたと「半生の記」に記述されています。現在は空地になっています。持ち主の石川芳宏さんのお話によると、祖母が大正～昭和時代に祈祷に携わっていたと母から聞いており、母は子供の頃手伝いをしていたそうです。建物は2棟あって1棟はお堂、1棟は祈祷待ちの部屋だったそうです。令和2年初め頃まで手水鉢が残されていましたが、今は撤去されています。遠方からお参りする人が多かったのでしょうか。

★②善哉小学校は、部会報第10号特集号に掲載しましたように1945(昭和20)年に戦災で焼失しています。以後復興はありませんでした。

★③本町の祖母住み込み宅の当時の写真はありませんが、現在の本町一丁目9の南西に位置しています。祖母住み込み宅に、良く遊びに行っていたそうです。新町4丁目辺りから、清水坂あるいは豊町の坂道を通りガス会社の上から下り、或いは赤岸通りを通り、ガス会社前の道を通って(半生の記に登り道を歩いたと記述)本町を往復していたのでしょうか。

★④現在の4丁目辺りの生活では両親は「餅屋」を営んで生計を立てていたと半生の記に書かれています。

いずれにしても大正時代の前半のことで、当時、上田中町、貴船町周辺は日本陸軍の要塞基地でありました。この頃の風景は清張の眼にはどう映っていたのでしょうか。「半生の記」には記述がありません。当時、貴船町では貴船神社、上田中町では五穀神社などのお祭りがあったと推察しますが、この辺りのことも記述がありません。父親が当時の裁判所(貴船町)に出入りしていたとのことですが、赤岸通りはさぞ賑やかな街並みであったのではなかろうかと、清張はこの辺りまで遊びに行っていたのでしょうか。